七十七ニュービジネス助成金受賞
第 21 回（2018年度）

企業インタビュー

Interview

株式会社未来企画

代表取締役　福井　大輔 氏

会社概要

住　　所：仙台市若林区荒井７－４－１
設　　立：2011年
資 本 金：５百万円
事業内容：介護・メディカルサポート業
従業員数：65名
電　　話：022（352）7613
ＵＲＬ：http://andanchi.jp

新しい複合福祉施設「アンダンチ」を開設、入居者と地域住民との多世代間交流が育まれる魅力的な「街」の創造を目指す

今回は「七十七ニュービジネス助成金」受賞企業の中から、株式会社未来企画を訪ねました。当社は高齢者向け介護・福祉施設の運営会社で、2018年仙台市荒井地区に新しい複合型の福祉施設「アンダンチ」を開設しました。約1,000坪の敷地内にサービス付き高齢者向け住宅（“サ高住”）を中心に保育園やレストランなどを併設し、高齢者と地域住民に新しい生活の場を提供します。当社の福井社長に、今日に至るまでの経緯や事業内容等についてお伺いしました。

――七十七ニュービジネス助成金を受賞されたご感想をお願いします。

新しい複合型の福祉施設に対しこのような評価を頂けてとても嬉しいです。今回の受賞は当社以外の福祉の事業所にとっても、イノベーションを進めていく上で励みになると思います。いただいた助成金で、障がい者就労支援施設で使用する３Ｄプリンターを購入する予定です。障がい者の方々のデザインの才能を活かした新たな仕事を生み出したり、就労支援を行っていない休日には地域住民向けのワークショップをしたりと活用できればと考えています。

安心できる住まいを

――会社設立の経緯を教えてください。

起業のきっかけとなったのは妻の父でした。義父は腎臓医で、人工透析を必要とする患者の診察もしています。その患者が、週に３回の透析を必要とする自分の今後について心配する様子をみて、看護・介護が必要な方も少しでも安心して暮らせる住まいを作れないか、事業にできないかと言われました。私は当時一般企業で働いていたのですが、学生時代

から自分で何か始めたいとの思いを持っていたこともあり、義父のサポートをしながら介護・福祉事業を始める決断をしました。

本社

課題解決を目指す

――経営理念について教えてください。

「医療支援・介護・福祉関連の包括的事業を通し社会的課題解決に向け、常に高い志と使命感を持ち人々の人生の質の向上に貢献する」としています。一番大切にしているのは、社会的な課題をビジネスで解決することです。学生時代にケニアへ留学した際、ただ与えるだけの支援ではなく、現地の人に仕事をして生まれる充実感を知ってもらう、積極的にできることをしてもらうといった支援の必要性を感じたことが今の事業にも通じています。

私が介護福祉事業を始めてから、この業種は世間からずれていることやおかしなことの多さに気が付きました。例えば、一般的に社会人は自分の名刺を持っていますが、介護職の現場のスタッフは持っていないことが多く、主任などの役職に就いてやっと名刺が持てるようになります。私は前職が商社でしたが、初めて自分の名刺をもらった時に社会人としての自覚・責任感が湧き、意識が変わりました。介護職の離職率は他業種と比較しても高いと言われますが、名刺もその問題の解決の一助になるのではないかと思い、当社のスタッフには全員名刺を持たせました。業界の常識にとらわれず変えていきたいと思っています。

――事業内容について教えてください。

2015年７月に小規模多機能ホーム「福ちゃんの家」を設立しました。ここでは小規模多機能型居宅介護事業を行っています。通所、宿泊、訪問を組み合わせて利用者が必要とするサービスを提供し、住み慣れた地域に安心して住み続けるための手伝いをしています。立ち上げの際はとても苦労しましたが現在は非常によい状況で、職員は16名おり、29名の定員に対して現在の利用者が25名、2019年１月には利用者が３名ほど増える見込みなので定員に近い状態です。

2017年６月に居宅介護支援事業所を、７月に訪問介護事業所を設立しました。これはご自宅に訪問して食事や入浴の介護や掃除・洗濯などの援助を行うサービスです。ケアプランを作成しそれに基づいて支援を行っています。

2018年７月には全国でも珍しい複合型の福祉施設である「アンダンチ　医食住と学びの多世代交流複合施設」を開所しました。

アンダンチレジデンス（右側）

アンダンチ

――アンダンチについて教えてください。

従来は閉鎖的なものだった福祉・介護施設の常識を変えようと、地域に開放された施設にしたいとの思いで作った複合型福祉施設です。敷地内には、サービス付き高齢者向け住宅（“サ高住”）「アンダンチレジデンス」、看護小規模多機能型居宅介護事業所（“看多機”）「ＨＯＣカンタキ」、企業主導型保育園である「アンダンチ保育園」、障がい者就労継続支援B型事業所「アスノバ」、寝かせ玄米を使用したレストラン「いろは」、アンダンチレジデンス入り口に位置する「駄菓子屋　福のや」等の施設があります。このような複合型福祉施設は全国でも珍しく、従来の施設の考え方を大きく転換するものです。実際に「アンダンチ」へは他地域での展開も期待できると、設立以来県内外から500人以上が視察に訪れています。

「アンダンチ」という名前は、仙台の方言で「あ

なたの家」を意味する「あんだんち」という言葉に、あなたの「地（場所）」、「知（知恵）」という意味を込めて命名しました。高齢者や、医療や介護が必要な人だけでなく、地域住民や子どもなど様々な人が行き交う場所にすることで、多世代交流が生まれる場にしたいと考えています。

「アンダンチ」施設見取り図

――アンダンチ内の施設について教えてください。

○“サ高住”「アンダンチレジデンス」

高齢者向けの賃貸住宅で、介護サービスの提供だけでなく、隣接する“看多機”や医療モールと連携することで医療面でのケアを充実させています。

施設内には一般的な“サ高住”と同様に、入居者の個室と、リビングや浴室などの共同スペースがあります。しかしアンダンチレジデンスは施設ではなく入居者の家だと考えており、「暮らし」を大切に考え住宅のデザインや内装を決めています。例えば、新たな人との繋がりが生まれるよう昔の長屋をイメージした形になっています。リビングに同じ机といすを規則正しく並べると「施設」という雰囲気が強まるので、あえてデザインや質感の異なる机といすを置いています。また、無垢のフローリングを使用し、昔の冷蔵庫などをインテリアとして置くことで、入居者のご家族の方からも住みたいと言ってもらえるような施設を目指しました。

また、入居者それぞれのライフスタイルや生活習慣を大切にしています。施設に合わせて入居者を縛るのではなく、施設がその人の生活に合わせることで本人が望む暮らしを行えるようサポートすることを心がけています。

利用料金は一般的なサ高住と比べて高めですが、医療的ケアが充実していること、アンダンチ内のレストランが提供する美味しく健康的な食事がとれること、入居者が生活しやすいこと等様々なメリットがあります。

共同スペース

○“看多機”「HOCカンタキ」

当社とは別の医療法人で運営している施設です。主に通所・宿泊・訪問介護看護といったサービスを24時間365日提供しています。隣接するため入居者向けの施設だと思われがちですが、基本的に地域の方を訪問しケアを行っています。利用登録定員は29名ですが、急に人数を増やすと利用者一人一人に最適なケアを行えない可能性があるため現在は14名ほどの登録です。徐々に増加を見込んでいます。

○「アンダンチ保育園」

企業主導型の保育園で定員の半数以上は従業員枠となっており、施設の職員は働きやすくなっています。もちろん地域の子どもも入園することができます。定員は19名で現在17名が利用しています。少人数での保育ですので、子ども一人一人に手厚い保育を行うことができます。少人数保育は社会性を育むための交流が少ないと言われることがありますが、この園ではアンダンチ自体が小さな街となっていて様々な人と交流することが可能です。さらに多世代交流が生まれることで様々な相乗効果が期待できます。

○レストラン「いろは」

東京を中心に展開している、寝かせ玄米を主力商品とするレストランで、テナントとして健康的で美味しい食事を提供します。昼は定食屋、夜は居酒屋として営業し、さらに寝かせ玄米やその他の食品の販売も行います。サ高住や保育所等アンダンチ内の施設の食事提供も行っています。

玄米は健康にいいと有名ですが食べにくいものです。しかし「いろは」では炊き方を試行錯誤して、

おこわのようなもちもち感を持つおいしい寝かせ玄米を提供しています。飲酒しても一日一食玄米を食べると健康になるそうで、無理なく健康を維持することが可能です。

当初はレストランも当社で運営し、「いろは」に監修していただく予定でしたが、「いろは」の理念・思いとアンダンチのコンセプトが通ずるところが多かったため出店していただくことになりました。本事業で地方初出店で、地域の交流の場となることを目指しています。

レストラン「いろは」

○障がい者就労継続支援B型事業所「アスノバ」

現在は就労支援で主にレジデンス等の清掃業務を行っています。他に、飲食、介護、保育、庭木の世話、印刷等、複合的施設だからこそ様々な仕事があり、その人に応じて、適切な仕事に取り組むことができます。一階部分は物販で、地域の人が製作した雑貨や、他の就労支援施設で製作した物品等の販売も行い、就労支援の一つになっています。

○駄菓子屋「福のや」

当社の運営で“サ高住”の入り口部分にあります。駄菓子屋自体は学区にここしかないこともあり、多くの地域の小学生が来てくれます。平日昼間には、地域のお母さんが子どもを連れてきてお菓子を買い“サ高住”内のソファで休憩していくこともあります。地域の人にアンダンチに来てもらうために、レストランと並んで交流の場となっています。

「福のや」の様子

○庭

敷地内に様々な花や木を植え、昔懐かしいポンプ式の井戸や池があります。敷地内をアスファルトで造ると低コストで済みますが、地域の方々が気軽に訪れる場にはならないと思い、「庭」を造ろうと考えました。現在は散歩や、子どもを遊ばせるために来る人もいて、こだわってよかったと思っています。

庭ではヤギを２匹飼っています。東北工業大学から譲っていただき、マスコットとして愛されています。ヤギ小屋の看板を入居者と保育園児で作るイベントも行い、交流を生み出すきっかけとなっています。

ヤギとのふれあい

――アンダンチ開設の経緯について教えてください。

小規模多機能ホーム「福ちゃんの家」では、グループの医療法人による訪問看護や診療も行っていました。その過程で、医療的支援が必要だが自宅での生活を望む方の期待に沿えるような取り組みをしたいと思いました。小規模多機能型居宅介護はデイサービスの通所介護を中心に、必要に応じてショートステイや訪問介護を行うサービスですが、この内容に加えて訪問看護を行うサービスである“看多機”を始めようと考えました。また、利用者からは住みたいとの要望もあり、住める施設の設立も検討しました。グループホームは認知症ケアに適した施設ですが、看護師の配置が義務付けられていないため医療的ケアが必要になると退去せざるを得ない場合があります。そこで、“看多機”を併設したグループホームを設立し、医療的ケアを充実させた施設を作ろうと思

いました。

同時期に、他の介護・福祉業者が実施している、健康・医療・介護に関する啓蒙や相談を行う「暮らしの保健室」という取組みを実施したいと考えていました。今後は医療と介護が必要になる前に学ぶことが重要になると思っていたからです。このような窓口は既に仙台市内にいくつかありますが、どこも堅苦しい雰囲気でした。私は、現在介護を必要としない方も気軽に学べ、介護をする人もお互いの話をすることで気持ちを楽にする場を作りたいと考えていたので、一般の方も来やすい相談窓口になるように飲食店を作ろうと思いました。

「暮らしの保健室」開設のため地下鉄沿線でテナントを探しましたが適当な物件が見つかりませんでした。一方、グループホームの土地は荒井地区に購入できることになりました。広さは1000坪あったため、グループホームを拡大して“サ高住”にして“看多機”に加え、さらに飲食店、障がい者就労支援施設、保育園も造り、その中で「暮らしの保健室」を行うことに決めました。

当初のグループホームに“看多機”を併設する計画と、「暮らしの保健室」と飲食店を組み合わせる計画をまとめ、さらにやりたいことを詰め込んでできあがったのが「アンダンチ」です。

多世代交流を生み出す

――アンダンチの特徴について教えてください。

様々な施設があり、子どもから高齢者まで多くの人が利用できることが一番の特徴です。“サ高住”に入居する高齢者、保育園の子どもたち、駄菓子屋に来る小学生とその親、施設で働く職員等で多世代間交流が生まれています。例えば、通常保育園にはピアノがありますが、アンダンチでは保育園でなく“サ高住”のリビングに置いています。子どもたちが定期的に“サ高住”を訪れ、歌やダンス等の練習を行うと、そこで高齢者との交流が生まれます。認知症患者には、生活リズムを崩し夜眠れないといった悩みを持つ方も多いですが、定期的に子どもと交流することで生活の規則性を取り戻し、症状の改善に繋がることがあります。子どもにとっても高齢者と触れ合うことで人間性や社会性を育むことができます。今後はさらに輪を広げ、地域とアンダンチの交流を増やし、活性化させていこうと思っています。

また敷地内の交流は、スタッフの人材育成にも繋がっています。例えば上記の保育園の子どもたちと“サ高住”の高齢者の交流を見据え、保育士には認知症の教育を行い、介護スタッフには子どもたちの顔や性格、配慮すべき事項などの情報を提供しています。実務上必要な情報共有というだけでなく、様々な分野の知識・経験を積むことができますし、興味があれば敷地内の別の施設へ異動することも可能です。スタッフにとって働きやすく、キャリア形成という意味でもいい環境になっていると思います。

多世代交流の様子

――アンダンチの事業構造について教えてください

現在介護事業は、社会保障費の問題から収支が厳しい状況にあります。一本の事業だけではやっていけない状況が介護ではより顕著です。

現在アンダンチには“サ高住”等を運営する当社と、「カンタキ」を運営する医療法人、レストランの「いろは」の３つの法人が関わっています。当社は“サ高住”等施設の利用者からの料金だけでなく、「カンタキ」とレストラン「いろは」からの賃貸収入も得ています。「カンタキ」は今後アンダンチレジデンスの入居者からの利用も見込めます。レストランは入居者やスタッフ、園児などアンダンチ内の食事の提供をしているため、施設が満員になれば食事の提供だけで収支が成り立ち、地域の方の利用によってさらに利益が出る見込みです。アンダンチでは複合的に施設を運営することで全体での相互補完的な収益体制が成り立ち、安定した収入に繋がっています。

――アンダンチを街にするための工夫について教えてください。

地域に開かれた街として多くの方に知ってもらい、訪問していただけるように様々なイベントを開催しています。アンダンチが開所してすぐに縁日を行いました。当時はボランティアの方の協力で近隣住民にポスティングを行ったところ、約400名もの人が来てくださいました。“サ高住”の軒先を利用した流しそうめんや、庭で行ったスイカ割りなどがとても好評でした。

12月には地下鉄東西線のWE PROJECT SENDAIと共同でクリスマスマーケットを行いました。（WE PROJECTは地下鉄東西線の開業をきっかけに、市民の手で仙台を面白くするための市民参加型プロジェクト）約20の出展団体が屋台を出したり、中学校の吹奏楽部や、地域のチアリーディングのステージがあったり、庭にあるピザ窯を使用してピザを振舞ったりして大盛況でした。

こういったイベントの他にも、“サ高住”のスペースを貸し出した子育てサークルの実施、知り合いの画家の協力で行った絵画のワークショップ、VRを使用した認知症の体験会や若年性認知症等の勉強会も行っています。

次の課題の解決を

――今後の事業展開について教えてください

一般的に料金が月に15万円程の高齢者向け住宅が最も需要があります。アンダンチレジデンスは料金がやや高めのため裕福層向けだと思われがちですが、私たちの理念やケアの方針を体現したトップブランドとして運営し、あと半年で入居率80％を目指しています。その後、セカンドブランドとして、理念に基づいて運営しながらも料金を抑えた高齢者向け住宅の設立を考えています。その住宅が、当社設立時に義父に言われた、高齢者が安心できる住まいにあたると考えています。

地域住民との交流

その他に、障がい児の放課後等デイサービスを始めたいと考えています。放課後等デイサービスとは６～18歳までの障がいを持つ子どもを対象とした、自立支援や日常生活の充実のための活動を行う福祉サービスです。この事業所は青葉区に約30カ所、宮城野区と太白区、泉区に約20カ所ありますが若林区には10カ所しかありません。特別支援教諭や若林区長と話をして、この事業所の少なさは地域の課題であると感じ、2019年４月に荒井駅の近くで事業所を開所予定です。

理想を追い求めて

――事業を行う上で大切だと思うことについて教えてください。

自分がやりたいことでどんな課題を解消したいか、問題解決できるかどうかをまず考えています。認識している課題に対して、理想、あるべき姿、ありたい姿をしっかりと自分の中で考えて、理想を下げずにやりきるための覚悟を持つことが大切です。アクションを起こさなければ現状のまま良くも悪くもならないので、覚悟を決めた上で最後までやりきることを大切にしています。

福井社長

長時間にわたりありがとうございました。御社の今後ますますの御発展をお祈り申し上げます。

（2019.　1．７取材）